

評価項目 1	<p>(ア) 体系的な履修を促す科目編成となっているか</p> <p>(イ) 開講科目数は履修登録者数、専任教員の担当状況から見て適切か</p>
参照資料	<ul style="list-style-type: none"> ・開講科目・講義数の状況（科目区分別・3カ年程度） ・単位修得要領（カリキュラムマップ） ・カリキュラムマップ集計データ（アセスメントブック） ・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3カ年） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 2022 年度の英文学科では、「教育課程編成・実施の方針」に基づき、広く英語学および英語圏の文化・文学・コミュニケーションについての知見を修得するとともに、実用的な英語力を身につけることができるよう、各科目の関係・順次性を明示した体系的な科目編成がなされている。この点で、学生の受講科目数とそれに対する開講科目数は適切であると判断できる。また、「カリキュラム集計データ」より、英文学科の専門科目を受講して、「汎用的技能」の修得度がかなり高まり、「知識・理解」の修得度も高くなっていることは評価できる。英文学科の科目編成としては、(特に1, 2回生の) スキル科目では、英語の基本的な4技能の定着と発展に重点を置き、「汎用的技能」の向上を目指し、(特に3, 4回生の) 英語学、文学・文化、異文化理解などの専門科目では、高度な知識の学びと情報分析力を高めることに重点を置き、「知識・理解」の向上を目指すものになっている。また、学科のほとんどの科目が「対話・相互理解」の修得度向上に関係した科目編成になっている。科目数については、2019 年度から 2021 年度にかけて大きな変動はないが(88→89→87)、講義数については、2019 年度と比べて少しの減少が見られ(208→200→201)、より体系的な科目編成となっている。現在、英文学科では新学部設置のための改組に向けて、科目編成を様々な視点で検討しているところである。

(イ) 上述したように、英文学科の開講科目数は、2019 年度から 2021 年度にかけては 88→89→87 と大きな変動は見られない。また、専門科目について、科目群別非常勤比率(2019 年度から 2021 年度)を確認すると、67.3%→70%→70.1% と多くの割合で専任教員が担当しており、教員間および教員と学生間のコミュニケーションがより容易なものとなっている。さらに、平均受講者数は、上記3年間で 42.6→44.9→45.6 となっており、文学部では一番多い人数ではあるものの、教員と学生間のフィードバックや学生同士の討論等が可能である受講人数となっている。以上から、現専任教員数 11 という数字(および CAP 制における履修登録の上限)を考慮しても、開講科目数は妥当なもの判断できる。ただし、将来的には ST 比(学部学生数÷学部教員数)が 30 以下になるように検討する必要がある。

【成果が上がっている点】

(ア) 学生の修得度アンケートでは、「知識・理解」の項目にある「人文、社会、自然など、広い教養を

有している」と「汎用的技能」の項目にある「日本語を正確に理解・表現できる」において高い修得度が見られる。これは、英文学科の科目編成により、英文学、英語学、英語教育、異文化理解の4分野の知識・内容がバランスよく提供されており、さらには、英語表現力だけでなく、日本語表現力の向上にもつながっていると考えられる。

また、学生の満足度アンケート（卒業時）では、「国際感覚が身につく授業が多い」、「語学力が向上する授業・制度が充実している」、「プレゼンテーション能力が身につく授業が多い」などの項目で高い満足度を得ている。これも、英文学科の科目編成により、グローバルな視点に立った幅広い知識の提供がなされ、コミュニケーション能力を高めることにつながっていることを示唆する。以上より、英文学科では、ディプロマ・ポリシーの各項目がバランスよくカリキュラムに反映されており、体系的な科目編成となっている。

(イ) 上述したように、学生の満足度アンケート（卒業時）で、「国際感覚が身につく授業が多い」、「語学力が向上する授業・制度が充実している」、「プレゼンテーション能力が身につく授業が多い」などの項目で高い満足度を得ている。それに加えて、「大半の授業に関して・その履修人数」の項目でも満足度が高く、開講科目数に応じて適切な受講学生の割振りがなされていると考えられる。

【課題となっている点】

(ア) カリキュラムマップにおいて、ディプロマ・ポリシーの「社会性・自律性」と「自立性」を高めるための科目数が、他のディプロマ・ポリシーの能力を高める科目数と比較して、若干少ないように思われる。これが要因かどうかは分からないが、ディプロマ・ポリシーの「社会性・自律性」にある「組織の中で、自らの専門的知識・理解・技能、個性や能力を活かして協働できる」と「適切なリーダーシップを発揮できる」において、学生の修得度が低くなっている。同様に、ディプロマ・ポリシーの「自立性」にある「卒業後も生涯を通じて学び続けられるよう、自立的な学習能力を身に付けている」においても、学生の修得度が低くなっている。今後は、学科会議において、ディプロマ・ポリシーとカリキュラムとの対応関係を協議し、カリキュラムマップの妥当性を検討することにより、カリキュラムマップの紹介や実質化に取り組むことが必要である。

(イ) 上述したように、英文学科では1科目の平均受講者数が、2019年度から2021年度までで、42.6→44.9→45.6と少し増加傾向にある。この数は、文学部の他学科と比較しても、一番多い人数となっている。学生の満足度アンケート（卒業時）では、「大半の授業に関して・その履修人数」の項目で高い満足度を得ているが、コミュニケーションを重視する語学学習のためには、より少人数の環境が好ましい。これは、将来的にはST比（学部学生数÷学部教員数）を30以下にする、という大学全体の方針とも合致するものである。今後は、学科会議にて、履修人数、科目数、教員数について再検討が必要である。

評価項目 2	各種アンケート結果等から見る、教育上で「成果があがっている点」・「課題となっている点」についての検証（※アセスメントブック検証結果から流用）
参照資料	・卒業時アンケート（経年比較）

(イ)英文学科の成績分布(上位3評価区分)は、2019年度がA(30.8%),B(28.3%),S(18.7%)、2020年度がA(40.3%),S(23.9%),B(19.9%)、2021年度がA(39.9%),S(23.8%),B(19.1%)となっており、ここ2年間では同じような数字の分布が見られ、Sの数がBの数を上回っている。Sの数については、文学部では一番多い数を占めている。しかしながら、文学部内の2学科および他学科と比較しても、それほど成績分布に大きな偏りはなく、学科内においては問題ない状況と言える。また、成績分布(平均得点)でも、2019年度が76.63、2020年度が80.00、2021年度が79.41となっており、ここでも大きな点数の変化は見られず安定している。他の12学科と比較しても、特に点数が低いわけでもなく、高いわけでもない。さらに、卒業生の累積GPA分布でも、2019年度が2.98、2020年度が2.93、2021年度が3.07と12学科中では少し低い数字ではあるが、大きな数字の変化は見られず安定している。

【成果が上がっている点】

(ア)上述したように、3回生の満足度アンケートでは、「学んだ成果に対する成績評価のされ方」と「シラバスの記述のわかりやすさ」の項目において、12学科中でそれぞれ2番目と3番目という高い満足度(94.9と79.7)を得ている。さらに、ALCS学修行動比較調査(2021)では、「適正に評価されている」が39.9%を占め、12学科中で3番目に高い数字である。これは、学科として、シラバス(特に評価方法)を学生に浸透させることを重要視している成果である。引き続き定期的に検証を進め、現状把握に努める。

(イ)上述したように、英文学科の成績分布(上位3評価区分)、成績分布(平均得点)、および卒業生の累積GPA分布においては、大きな数字の偏りは見られない。また、英文学科の3回生は「成績評価のされ方」にとっても高い満足度を示している。これより、英文学科全体として、適切な成績評価を実施していることが分かる。今後も、成績評価基準を明確にし、学生への説明を徹底していきたい。

【課題となっている点】

(ア)3回生の満足度とは対照的に、1回生の満足度アンケートでは、「学んだ成果に対する成績評価のされ方」の項目で、12学科中で最低の満足度(63.8)となっている。また、「カリキュラムの表現やシラバス記述のわかりやすさ」の項目でも、12学科中で2番目に低い満足度(70.9)となっている。ただ、英文学科では、1回生に対しても、3回生に対しても、同じ指導方針で教育にあたっているため、なぜ両者の間でこのような相違が生じるのかが不明である。高校を卒業したばかりの1回生にとって、シラバスという用語は馴染みのないものであり、その閲覧の方法を知らない学生が少なからず存在する。今後は、シラバス(特に15回の授業内容と評価方法)について、授業内で繰り返し説明し、学生に理解させることが求められる。この件については、既に学科会議にて共有し、原因と対策について議論している。

(イ)特筆すべき事項なし

担当部局

英文学科

評価項目 4	(ア) カリキュラム上主要な科目には専任教員を配置しているか。 (イ) 非常勤比率の高いカリキュラムとなっていないか。
参照資料	・授業担当一覧 ・科目群別非常勤比率（3カ年程度） ・その他参照した資料（)

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア)授業担当一覧を確認すると、英文学科で主要科目と位置付けている科目については、専任教員を配置している。また、非常勤比率（3カ年）を確認すると、他学科と比較しても低い傾向にあり、専任教員の配置は適切であると言える。

(イ)英文学科の非常勤比率を確認すると、2019年度から2021年度までで、32.7%→30%→29.9%というように減少傾向にある。特に、この2年間の非常勤比率は、文学部の他学科と比べても一番低いものであり、大学全体の30科目群の中でも10番目に低い比率となっている。以上より、適正な非常勤比率のカリキュラムとなっていると考えられる。

英文学科は言うまでもなく外国語に関係した研究分野であり、英語の実践的な能力を高めるためには、英語母語話者による指導が必要である、また、英語の特殊な技能・能力が要求される分野・業種に関する知識・経験については、その分野・業種に精通した専門家による実践的指導が必要となる。このため、学生のニーズや満足度を満たすためには、現状の非常勤講師数は必要である。

【成果が上がっている点】

(ア)カリキュラム上主要な科目に専任教員を配置しているため、授業や学生に関する情報を専任教員間で共有し易くなっている。学生からの質問・相談についても、教員同士で連携して対応できている。

(イ)特に英語母語話者の非常勤比率が適正であるため、卒業時アンケートでは、「国際感覚が身につく」の項目における満足度が55.8を示し、12学科の中で1番高い満足度となっている。このことから、英語母語話者の非常勤数が適切に保たれ、実践的な語学指導がなされていることが分かる。

【課題となっている点】

(ア)特筆すべき事項なし

(イ)上述したように、英語母語話者の非常勤比率は適正ではあるが、それぞれの教員がどのような授業を展開しているのか不透明な部分があり、学生の授業評価を含めて、学科内で検討する必要がある。より充実した外国語学習のためには、よりよい指導者を非常勤講師として確保する必要がある。

評価項目 5	学科・専攻等個別の FD 活動について、どのような内容・目的で実施しているか。
参照資料	・ FD の取り組み状況 ・ 前年度点検シート ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

英文学科では、学科会議で課題や重点事項を共有した後、特に以下のような FD 活動を実施している。

- ① 授業担当者会議を開催し、シラバス（特に授業概要、評価方法、使用テキスト）について議論する。
- ② 授業評価アンケート、学生生活実態調査、学生満足度調査などを検証・分析する。
- ③ 英文学科留学プログラム参加学生の英語による発表会を開催する（英文学科全教員が出席）。
- ④ TOEFL / TOEIC テストを実施し、学生の得点結果を分析する。
- ⑤ 京都女子大学英文学会を組織・運営し、大会の開催（研究発表、講演会を含む）および学術雑誌『英文学論叢』と *Essays & Studies* の発行に従事する。
- ⑥ 優秀卒業論文を選考・認定する（英文学科全教員による意見交換・評価に基づく）。

①については、シラバスを学生に浸透させるために、全教員がシラバスの書き方、カリキュラムの妥当性、担当者の妥当性、授業概要、評価方法、使用テキストなどについて議論している。②については、授業の質を向上させるために、授業内容、内容の難易度、課題の量、評価に対する学生の反応、英文学科の学生の特徴などを議論している。③については、留学への関心を高め、留学者数を増やすために、実際に留学体験をした帰国学生による発表会を開催している。教員全員が参加し、学生の留学体験や語学学習の経緯を把握する機会となっている。④については、学生の得点アップのために、得点分布をデータ化し、傾向と学習方法を分析している。⑤については、学内・学外へ研究内容を公開するために、教員と学生による研究発表会を開催し、情報発信および地域貢献に従事している。また、同じ目的のため、教員と学生が投稿できる論文集を2種類発行している。⑥については、4回生と在校生の学問に対する研究意欲および各教員の論文指導力の向上のために、（全教員による審査・協議を通して）全4回生の卒業論文の中から優秀卒論として6～8人の卒論を選定している。認定された優秀卒論については、上記の論文集 *Essays & Studies* に掲載し、卒業論文の書き方の手引きとして在校生に配布している。今後も、新学部設置を見据え、上記の6点については継続していきたい。

【成果が上がっている点】

上記の①～⑥のFD活動において、特に①と②については、3回生満足度アンケートにおいて「学んだ成果に対する成績評価のされ方」と「シラバスの記述のわかりやすさ」の両項目において、12学科中でそれぞれ2番目と3番目という高い満足度（94.9と79.7）を得ている。④については、特に留学に関係するTOEFLの得点に着目すれば、2020年度と2021年度を比較すれば、留学基準点である470点に到達している学生が第1回目のテスト（1回生前期）では22人から26人に増えている。特

に reading セクションの得点率アップが見られた。⑤と⑥については、英文学科の学生には大きな刺激になり、研究への関心・興味を高める効果をもたらしているように思われる。また、研究論文集に掲載された優秀卒論は、在学生在が卒論を書く際の手引きとなり役立っている。

【課題となっている点】

FD 活動の③については、この2年間コロナウイルスの影響で、全学協定留学とともに英文学科の留学プログラムも実施されていない。そのため、昨年度は、留学経験者による発表会を開催することができなかった。今後も、コロナウイルスの感染状況次第で開催不可能となることも考えられる。同時に、このことは、④の TOEFL の受験者数にも影響を与え、留学が不可能となれば、受験者数が減少することにもつながる。新学部設置に向けて、今後の留学制度の在り方を議論することは、英文学科の重要な課題の1つである。

評価項目 6	(ア) 職位、年齢、性別のバランスに配慮した教員組織編成をおこなっているか。 (イ) カリキュラムに基づく教員組織となっているか
参照資料	・教員組織編制方針 ・専任教員の状況 ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア)英文学科の教員組織編成は、2020 年度と 2021 年度とは同じ編成になっており、12 人中、職位に関しては教授が 7 人 (58%)、准教授が 5 人 (42%)、年齢に関しては 60 歳代が 1 人 (8.3%)、50 歳代が 7 人 (58.3%)、40 歳代が 4 人 (33.3%)、性別に関しては男性が 8 人 (66.7%)、女性が 4 人 (33.3%) である。以上より、教授の比率については、大学教員枠基準の 60% を下回っており、男女比についても、どちらかの性別比率が大学教員枠基準の 70% を超えていないので、全体としてバランスの取れた編成となっている。

また、2022 年度は、教員数が 11 人となり、職位に関しては教授が 8 人 (72.7%)、准教授が 3 人 (27.3%)、年齢に関しては 60 歳代が 1 人 (9.1%)、50 歳代が 7 人 (63.6%)、40 歳代が 3 人 (27.3%)、性別に関しては男性が 7 人 (63.6%)、女性が 4 人 (36.4%) である。これより、教授の比率が大学教員枠基準の 60% を超えていることが分かる。今後の採用人事では若手教員の採用を考慮することが必要かもしれない。

(イ)カリキュラムとの関連については、カリキュラム・ポリシーを踏まえ、英語学英米文学および英米文化・英語教育で構成されるカリキュラムに対し、それぞれを研究分野とする教員を配置しており、カリキュラムと各研究分野が整合している。

担当部局

英文学科

【成果が上がっている点】

(ア)教育歴と研究歴が長く、研究者として優れた業績を備えた教員が多く、英文学、英語学、英語教育、異文化理解の各分野の最先端の情報と知識を学生に提供できている。また、卒業時満足度アンケートでは、「国際感覚が身につく授業が多い」、「語学力が向上する授業・制度が充実している」などの項目で高い満足度を得ている。これは、バランスの取れた教員組織編製の成果であるとも言える。

(イ)様々な研究分野をもつ教員が担当することで、幅広い学びを提供することができており、カリキュラム・ポリシーを踏まえたバランスの良い教員組織となっている。

【課題となっている点】

(ア)上述したように、2020 年度と 2021 年度の教員編成組織については、職位、年齢、性別においてバランスの取れたものとなっているが、2022 年度の教員編成については、職位に関して、教授の比率が 72.7%となっており、大学教員枠基準の 60% を超えている。また、性別に関しても、男性比率が 63.6%となっており、大学教員協基準の 70% に近づいている。これを踏まえ、今後の採用人事では、教授ではなく准教授か講師を採用することが必要になってくる。また、公募の際に、同等の業績や能力を有すると判断される場合は、女性を積極的に採用することも考慮に入れる必要があるだろう。

(イ)上述したように、2020 年度と 2021 年度の教員組織については問題ないが、その後 1 人の教員が転出したため、2022 年度の教員組織については、カリキュラム・ポリシー上、英文学科に必要な研究分野である「異文化理解」「比較文化」を指導する教員が欠けた状況となっている。今後は、至急、当該科目を指導できる教員を補充する必要がある。

評価項目 7	教育活動予算において実施している活動は、その目的に対してどのような成果をあげているか。
参照資料	・教育活動予算の執行状況 ・その他参照した資料（)

《各部局による点検・評価》**【検証結果（全体概要）】**

英文学科が教育活動予算（2021 年度）にて実施している活動は、①「TOEFL-ITP 試験の実施」、②「TOEIC-IP 試験の実施」、③「英語卒業公演の実施」の 3 つである。①、②については、英文学科の専門科目である「TOEFL 演習 I・II・III」および「TOEIC 演習 I・II・III・IV」に直接関係がある検定試験であり、カリキュラムマップにも反映されるものである。特に①については、英文学科留学プログラムの選考試験となるものであり、留学を希望する学生には受験が必須となっている。2021 年度から、①、②の両方ともオンライン試験となり、新型コロナウイルスの影響を受けずに計画通り実施することができている。しかしながら、新型コロナウイルスの影響により、留学プログラムそのものが中止となってしまったため、①を受験する学生が減少し、②を受験する学生が増加することとなった。2019

年度と 2020 年度の 1 回生後期の受験者比率は、①の TOEFL が 62% と 63%、②の TOEIC が 33% と 36% であった。これに対し、2021 年度の受験者比率は、①の TOEFL が 30%、②の TOEIC が 60% であり、①の受験者数が激減したことが分かる。そのため、2021 年度は、①への教育活動予算の支出が、計画当初よりも少額となってしまった。しかし、これは新型コロナウイルスの感染状況が原因であり、事前に予測することができないため、仕方がない結果である。

③の英語卒業公演についても、新型コロナウイルスの影響により、当初予定していた公演会場での舞台演劇を開催することができず、観客を招くこともできなかった。結果として、オンラインでの英語劇の動画制作・上映となり、規模も小規模なものとなった。そのため、③のための準備費・製作費（道具や機材など）への支出が低くなり、教育活動予算の支出が計画当初よりも少額となってしまった。これについても、新型コロナウイルスの影響によるものであり、止むを得ない結果である。

【成果が上がっている点】

①「TOEFL-ITP 試験の実施」と②「TOEIC-IP 試験の実施」により、学生の得点分布をデータ化することができ、学生が得意とする問題と苦手とする問題の傾向と対策を分析することができる。これにより、英文学科の専門科目である「TOEFL 演習 I・II・III」および「TOEIC 演習 I・II・III・IV」のクラス分け、指導法、教科書の選定、評価方法などについて、教員間で意見交換することが容易となり、複数クラス間の内容統一を図ることができている。この点で、①と②は、英文学科の FD 活動促進にもつながっている。また、②の TOEFL の得点に着目すれば、2020 年度と 2021 年度を比較すれば、留学基準点である 470 点に到達している学生が、第 1 回目のテスト（1 回生前期）で 22 人から 26 人に増えており、特に reading セクションの得点率アップが見られた。③「英語卒業公演の実施」はプロダクション形式での卒業研究の必須項目であるパフォーマンスのためのものであり、英語での表現力を翻訳・演技等の実践的取り組みを通して多角的に高めた。①と②の試験実施は、学生の英語力の目安と向上につながっており、③は卒業研究の一環であり英語での表現力を涵養していることから、今後も英文学科にとっては必要不可欠な活動であると言える。

【課題となっている点】

上述したように、①と②の試験の実施および英文学科留学プログラムについては、今後も新型コロナウイルスの感染状況に左右されるため、正確な受験者数を事前に予測することが難しい。そのため、受験者数の変動によって、教育活動予算の執行額にも変動が生じてしまうことが課題である。③についても、新型コロナウイルス感染症の状況を慎重に考慮しつつ充実した取り組みになるよう対応を続ける必要がある。次年度の教育活動予算については、学科内で検討し、教育活動予算の活用を進めていく。

担当部局

英文学科

実施責任者からの具体的な向上・改善施策（案）**具体的な向上・改善施策（案）について**

新型コロナウイルスの感染状況は未だ収束の気配を見ないが、2022 年 10 月より半年間、10 名の学生を協定大学へ派遣することが決まったことは、明るい兆しである。すべてが従来通りに戻るわけではないだろうが、英文学科留学プログラムの活性化に向けて、留学先の学生と本学とをオンラインで結ぶ経験交流会や留学生による TOFFL 受験に向けてのアドバイス講座なども企画できるかもしれない。また英語卒業公演の実施についても、新型コロナウイルスの感染状況を考慮して開催した実績があることから、新たな取り組みと多方面に向けた配信方法を練り上げてもらいたい。